

転生したら古き王と一 緒にいた件

雨叢雲之劍

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

初投稿作品です

これから描いていく作品は全て別々の世界でありますけどその世界に空間を切り裂いて関わってくるキャラがいたり原作キャラが元いた世界で関わっていたりします

目次

11話	受泡	久和	八羽	奈々話	呂久和	後話	IV話	参話	二話	1話	プロローグ
42	38	35	32	28	22	18	14	11	8	4	1

虹泡	波窮輪	樹8把	⑩奈々技	銃6把	集期過ン	十世環	住SUN輪	呪愛庭
87	84	78	74	70	67	62	58	52

プロローグ

とある楽園の神社

青と白色の髪が横向きにギザギザの模様した髪が腰まである青年と白色の短髪の青年が話をしていた。

青髪の青年「本当お前やらかしすぎだろ二、三回死ぬかと思ったぞ」

と青髪の青年が言うのと、

白髪の青年「マジであれば、やらかしすぎたはめんごめんご翼」

と白髪の青年が謝る気がなさそうに謝ると翼と呼ばれた青年が、

翼「いやマジで謝るんだったら真つ赤に染まった鉄板の上で土下座しろよシキ」

と無茶振りを振るう翼に対しシキと呼ばれた青年は、

シキ「それは後日動画で撮る予定だから今は無しで」

とそんな無茶振りを動画に撮るとかアホなことを言っていた、

翼「まあお前がそれをするなら別にいいけど、邪神三柱同時降臨とか二度とするなよ、しかもアザトースとヨグソトース、ニャルラトホテプ三柱の」

シキ「いやあちよっと暇つぶしにやったら思ったより大事になっちゃったぜテヘペ

口

と当たり前のようにとんでもないことをしでかしていた、

翼「それで今回被害どんなことになったんだ」

そう聞くとシキが、

シキ「被害らしい被害はないぞ、強いて言うなら過去、未来で死んだ人間の魂が、邪神どもの干渉のせいで裂けた空間の狭間に吸い込まれていったぐらいだな」

翼「オイそれまずいだろ、いくら死んでるとは言っても、地獄や黄泉の国に戻らないとダメな魂だろそれ」

シキ「まあ片手で数えられる程度だし、ルインからも下手に干渉するなって言われたし、だから大丈夫だ、問題ない」

翼「それ問題絶対あるだろ、まあルインが良いって言ってるんなら文句ないけど」とそのまま話し続けるのだった。

とある空間の狭間

??「ああどうしてこうなったんだろうオレは一体何を間違えたんだろう…?」

そこには一人の男がいた、その男は昔とある世界で全てを手に入れた王であった。

だが今ではどことも知れない空間に漂うことしかできなかつた。

なぜこのようになってしまったかと言うと、彼が生きてた世界には、侵略種族アグレツサと言う

種族がいた、そして彼はその中にいる最上位個体と戦い勝利を収めるが最後の一撃として時間転送を使われ受けてしまうそのせいでこのように空間を漂うことになってしまった。

だがもう彼にとつてはそのこともどうでもいいことだ、なぜならこの空間では何もできないからだ。

それに彼は最後に自身の肉体と魂を切り離し体の主導権を自身の究極能力アルティメットスキルに託した。きつと自分の世界は平和のまま発展してるはず彼はそう思っている

だから彼はこのままこのまま漂い続けようと思っていた。

だが心の底では彼は、元の世界に帰りたいと思っていた。だから彼は何を間違っていたか考える。

その時彼の近くに1つの魂を見つけた、その魂は今まさに世界を超えた転生をしようとしてる魂だった、その時彼は閃き最後の賭けに出ることにしたそれは…

1話

?? 「短い人生だったなー」

そう呟く男がいた、この男はつい先ほど通り魔から後輩を庇って死んでしまっていた、その時

?? 「オイそこのお前声が聞こえるか」

とかけてくる声が聞こえた。

?? 「ああまた幻聴か」

と男は流そうとしていたが、

?? 「幻聴じゃない、とりあえずオレの話を聞け」

とりあえずその男は声の主の言うことを聞くことにした。

?? 「聞く気になったか、なら今から俺のココロをお前に刻む、そしたら俺は、しばらく眠ることになる、だからお前は俺の代わりに俺を受け入れることができる器を探せ、代わりにお前に俺の力を貸すし目覚めたらお前のサポートもしようかまわんな」

?? 「えっでも…」

?? 「よしわかったなやるぞ」

そういうと声の主は、自身の全てを男の魂に刻み植え付けた、そして男の意識は暗転した。

そしてこの男は、そのあとスライムに転生し転生した洞窟に封印されていた暴風竜ヴェルドラにリムルⅡテンペストと名付けられるのだった。

それから数日後、リムルは自身の戦闘方法を考えてた時、

?? 「ようやく魂が安定した聞こえてるか転生者」

といきなり声が聞こえてきた。

リムル 「うわっなんだいきなりどこから聞こえてるんだ」

?? 「オイ俺のこと忘れてんじゃないよな」

リムル 「あああの時のなんか押し付けてきた謎の声か」

?? 「なんかとは失礼だなまあいい今の状況説明しろ」

リムル 「偉そうだなまあいい、今転生して名前をもらって、外に出た時のための戦闘方法を、考えてたところだ」

?? 「なるほどな、ついでに転生したのはスライムか、なかなか面白いことになってるな」

リムル 「どこがだよ」

?? 「世界を渡つての転生だけでも興味深いのに、さらに魔物それも最下級のスライム

だぞ面白いだろ」

リムル「いや全く」

??「そうか、それは残念だ。そういうえば名付けられたと言っていたなど言うのなんだ」
だ」

リムル「まずお前から名乗れよ、まあいい俺はリムルⅡテンペストそれでお前は」

??「俺か、俺はムツキ訳あってあの空間に飛ばされていた元王だ」

リムル「なるほど王様かマジで？」

ムツキ「マジだ」

そしてこの世界についての話と自分達の知識をすり合わせていた

ムツキ「まさか一発で目的の世界に来れたとは思わなかったな、それに竜種が四体まで増えてるなんてな」

リムル「お前どんな時代から来たんだよ、まあいいやそれより俺の戦闘手段を考えないとな」

ムツキ「それなら俺の知識にある魔法を使えばいい」

そういうとリムルの脳内に、本棚が出てきて魔法に関する本で目の前を埋め尽くされた。
た。

リムル「なんだよこれ」

ムツキ「これは、俺のスキルの一つ知識之本棚今まで調べてきた知識が詰まってる、今は魔法に関するものだけを出してる」

リムル「こんな量あつてだけかよ」

リムルが驚いたのは無理もない、今日の前にある本の数は少し見ただけで軽く10000冊もあるのだからだ。

ムツキ「それでも今お前が使える分まで制限してるんだぞ」

どうやらまだこれでも氷山の一角のようだ。

リムル「まあこれだけ使えればやばいやつ以外なら勝てるな」

ムツキ「当然だ俺が今まで貯めてきた知識なんだからな」

そう言つて本を読み出したリムルとリムルに覚えてたほうがいい魔法を漁るムツキは、ある程度魔法を覚えたあとこの洞窟を出るのであった。

一一話

二人は洞窟を出て森を彷徨っていた。

リムル『なあ外出してから結構経ってるのに魔物にすら合わないってなんでだ』

ムツキ『そりやお前がオーラ出しっぱだから怯えて出てこないんだろ』

リムル『えっ』

ムツキ『気付いてなかったのかよ』

リムル『そういうの早くいえよ』

ムツキ『常識だったからな』

そんな話をしてる時ゴブリンの群れが目の前に来ていた。

ゴ布林「強気者よこれより先に何か用がありますか？」

リムル「初めまして俺はスライムのリムルだ」

ゴ布林「これは失礼しましたまさか名前を授けられてる人とは知らずに無礼お」

リムル「いやそんなにかしこまらなくてもいいぞそれより俺になんかようか？俺はこ

の先に用はないぞ」

ゴ布林「そうですか、これより先に我らの集落がありました」

暫くこのゴ布林達の会話をしたあと

ゴ布林「泊まる場所がないのでしたら我らの集落に来ませんか？」

と言ってきたので、

リムル『ムツキどうする？』

ムツキ『間違いなく強いやつにすがりたいだけだろうがこつちも行くところがない、行くのもいいだろう』

リムル『了解』

リムル「わかったお前達の集落に行かせてもらおう」

と言ってゴ布林達の集落に行くリムル達であった

そうしてゴ布林達の集落について中央の家に入ると、さつきリムル達を案内していたゴ布林のリーダーが、村長らしきゴ布林を支えてやって来た。

村長「大したもてなしも出来なくて申し訳ない、私はこの村で村長させて頂いている者です」

リムル「そうか、で俺を自分達の集落まで招待したってことは、なんか用事があったのか？」

村長「実は、最近、魔物達の動きが活発になつてるのは、ご存知でしょうか？」

リムル「ああ、それは知ってる」

村長「我らの神であったお方が、この地の平穩を守護していただいていたのですが、一月ほど前にお姿をお隠しになられてしまったのです。その為近隣の魔物達が、この地を求めて動き始めまして、我々も黙っていられなくなりましたので、応戦したのですが、戦力的に厳しく何も出来ない状況です」

リムル『おーいムツキ、神ってヴェルドラさんのことか？』

ムツキ『ああそうだろうな時期的にあってるし』

リムル『どうしたらいい』

ムツキ『お前、もう答え決めてるだろ、好きにすれば良い、俺は今お前にひつついてる存在だしな出来る限りはサポートする』

リムル『ありがとなムツキ』

ムツキ『どういたしまして』

こうして二人はゴブリン達を助けることに決めたのであった。

参話

それから二人は、ゴブリンの村を守るため行動を始めた。

まずは、負傷しているゴブリンの所に行き、一人一人リムルの胃袋に入れ込み、回復薬をかけて回復させた。

次に、村の周りにムツキの土属性の魔法を展開して柵を作り出し、洞窟内でリムルが取り込んでいた魔物のスキルの一つの粘糸、鋼糸を利用し、罠を設置した。

これでは、牙狼族が来るのを待つだけになった。

リムル『ムツキ罠とかってこんなもんでいいのか？』

ムツキ『まあ、今できるのはこんぐらいだろうな』

リムル『後は、牙狼族が来るのを待つだけだな、そうなると暇だな、あいつら火の番とかそんなことやらせるわけにはいけませんって言って、やらせてくれなかったし』

ムツキ『当然だな、現状リーダーはお前だ、あいつらはただ祈るだけの存在じゃない、指導者の命令を聞きそれを実行する程度の知能はある。それに、魔物は上下関係が人間なんかよりもはっきりしてる、お前がリーダーになった以上責任は持てよ、あと暇ならお前の世界の知識を話せ、俺はそれに興味あるぞ』

とこのままりむとムツキは話しているうちに夜になり、牙狼族が来た。

そしてリムルが、正面に立ち（スライムなので転がってます）

リムル「よし！そこで止まれ。ここで引き返すなら何もしない。とっと立ち去れ」

と、そう言い放った。

だが牙狼族は、その警告を無視し飛びかかって来てあえなく設置していた罠に引っかかり粘糸によって弾き返されるものと、鋼糸によって切り刻まれるものにわかれた。

そうして戦闘いや、蹂躪が始まった。

柵の間にある隙間から、ゴブリンたちが下手だが弓矢を射抜き牙狼族を近づけさせなかった。

そして、自分の力を誇示するために自ら来た牙狼族のボスを、設置していた粘糸で捕縛したリムルは、躊躇わずスキル水刃でボスの首を切り落とした。そしてリムルはボスの死体を、捕食者で喰らいその姿見めせることで威圧しつつ円滑に話を進めれるようにした。ちなみにそれを考えたのはムツキである。この後の展開も、ムツキはある程度予想がついてるらしい。

そしてリムルが

リムル「聞け、牙狼族！お前たちのボスはこの俺が殺した！お前らに選択肢をやる。服従か、逃亡か！」

リムル（よしこれで牙狼族もこれで、大人しく逃げるだろう。ムツキは、逃げないだろうって言ってたけど、これ以上面倒にはならないだろう）

とリムルが考えていたが

牙狼族「我等一同、貴方様に従います！」

と言い、一斉に平伏されたのだ。ただ犬が伏せしてるようにしかみえない模様。そしてリムルの予想に反して、牙狼族は服従を選択した。

IV話

リムルは、面倒事が全て片付いたと思っていたが、本当に大変なのは、戦いが終わった後だった。服従した牙狼族をどうするか、何匹が死んでいたようだが、まだ80匹近く生き残っていた。リムルは、とりあえず柵の外に待機命令を出し、その場で解散とした。

そして翌日、昨晚リムルが寝ずに考え出した（スライムなので眠る必要がない）。ちなみにムツキは、リムルに責任持てと言つて、一切考えておりません。

まず初めに、ゴブリンと牙狼族を集めて

リムル「これからお前らには、二人組になって過ごしてもらおう」

そう言うのと素早くゴブリンと牙狼族のペアを作った。

そしてリムルはあることに気づいた。

リムル（そういえば、こいつら名前がないよな。名前考えるか）

と考え村長に話しかけようとした時、

ムツキ『待てリムル、それは危険だぞ』

リムル『どう言うことだよ』

ムツキ『魔物に名前を与えるとな、自身の魔力を持つていかれるんだ、俺でも昔に7体のみ名前を与えた、下手したら命の危険に関わるぞ、真剣に考えろよ』

リムル『そうなのか！それは、まずいな、でも名前ないと不便だし』

ムツキ『ハア、わかった俺が内部からお前の魔力の流出を抑える好きにしろ、だが逆されても知らんぞ』

リムル『サンキューって反逆ってなんだよ』

ムツキ『名付けをした時、名付け親は、子供を従属させることが可能なんだよ、だがごく稀に親を上回る魔力を持つ子が名前をつけた影響生まれる、そうすると親の言うことを気がずに暴走することがある』

リムル『そうか、わかったきおつけるよ』

ムツキ『それでやめないのかよ』

そう言いながら、ゴブリンや牙狼族に名前をつけていった。

ゴブリンリーダーに、兄のリグルの名前を与えて、村長にリグルドの名前を与えた。

牙狼族には、流石に全員に与えることは、ムツキに反対され、ボスの息子にランガという名前を与えた。

原作なら低位活動状態スリープモードになったがこの話では、ムツキのおかげで眠りません。

そうして、しばらくすると全員眠りについた。

リムル「どうしたんだみんな！」

ムツキ『全員、進化の眠りについたんだろ、ほっといたら起きるそつとしいてやれ』
リムル『それなら安心だな』

そう言つてリムルはみんなが起きるのを待っていると、目の前にボロボロの金色の狼が倒れてるのを見つける。

リムル『ムツキあれつて』

ムツキ『結構ダメージ喰らつてるな、でもどつかで見たことあるな』

リムル『そんなことより助けるぞ』

ムツキ『仕方ないなまた名前つけるのか？』

リムル『当然だな』

ムツキ『やれやれだぜ』

そう言いながら

リムル「大丈夫か」

そう聞いても返事わ帰つてこなかったが息はしてるようだった。

ムツキ『まずは、ポジションを掛けろ、そのあと名前を付けろそいつが受け入れたら勝手に名前が付く』

リムル『わかった』

そういうと、リムルはポーシヨンを振り掛け

リムル「お前にカシムって名前をやるいいか？」

そう言う

カシム「あり、がとう」

と言って完全に気絶した。

後話

全員に名前をつけ終わったあとリムルは

リムル『どうしてこうなった』

ムツキ『何がだ？』

リムル『みんなのあの姿だよ』

ムツキ『いや、進化しただけだろ』

リムル『進化しすぎだろ、特にリグルドどうやったらあんなヨボヨボの爺さんが、あんな筋肉質なナイスボディーになるんだよ』

ムツキ『知らん、名付けによる進化わな、名付け親の理想が反映させるんだよ』

リムル『つまりあそこまで進化した理由は、俺にあると』

ムツキ『少なくともお前は、人間のようにつて思ってただろそれが原因だろうな』

そう言ったあと話し合いを切って現実を見ることにした。

今日の前では、

ランガ「我こそが主のペット座に相応しい、二番手は、お呼びじゃないさつさと失せろ」

カシム「僕より弱い奴が吠えるなよ、ご主人のペットの座は僕のものだ」

と何故かリムルのペットの座かけて争っていた、ムツキ曰くカシムの方が圧倒的に強いそうだ。

そしてリムルが

リムル「お前たち、そろそろやめろよ、今からやることあるんだからな」

ランガ&カシム「わかりました主（ご主人）」

そういうと二匹とも綺麗に並んで座った

そしてリムルが今いる全員を集めて

リムル「これからみんなに、これからのルールを決めるいいな」

と言った

そのルールは、

一つ 人間を襲わない

二つ 仲間内で争わない

三つ 他種族を見下さない

この三つのルールを全員に提示したそしてリグルが

リグル「よろしいでしょうか！なぜ、人間を襲ってはならないのですか？」

リグルがそう聞いてきたので、リムルはムツキにあらかじめこう言つとけと言われた

ことを話す

リムル「人間を、襲うとな必ず反撃に来る、人間は多くいる、それこそ俺たち以上にだから下手に手を出すことを俺は禁止する、だからってこちらがやられっぱなしになることはそれはそれでダメだぞ」

そう言う

リグル「なるほど、わかりました」

と言つて素直に了承した

リムル「他になんか質問はないか？」

リグル「では、次なんですけど他種族を見下さないとはどう言うことでしょうか？」

リムル「それは、簡単だお前らが進化したけど調子に乗るなつてことだ、上には上がいる調子に乗ると足元をすくわれるぞつてことだ」

村のルールを決めを終わり、そのあと少し作者がめんどくさくなりカットした間にリグルドをゴブリンロードに任命したりしてました

とりあえず作者は後で始末しましょうそうしましょう。

作者「?????さんやめてください死んでしまいます」

ならめんどくさながら書いちゃダメ

作者のことは一旦置いてきましょう

リムルはムツキに聞かれてドワーフの国がないか聞いたら武装国家ドワルゴンがあると聞きそこに行くための準備をすするのだった。

呂久和

リムル『ムツキなんでドワーフの国に行く必要あるんだ？俺もみてみたいけど』

ムツキ『建築とかならドワーフが最も長けてるからだ。お前の知識にそうあるだろ』

リムル『なんで俺の知識知ってるんだよ』

ムツキ『お前の記憶を暇つぶしにのぞいからな』

リムル『オイ』

ムツキ『そろそろ準備が終わったみたいだな』

リムル『後で問いただすからな』

そう話していると、ムツキが言つてた通りみんなの準備が整つたようだ。今回はリグル

をリーダーとした5人組とランガとカシムが来るそうだ。

そしてリムルはカシムの上に騎乗していくことになった（カシムとランガの壮絶な争いの末カシムに決まった）

そうして話しながら向かっていると（ランガはリムルの陰に潜んでる模様）

ムツキ『リムル、そういえば少し気になるんだが、初代リグルに名付けを行ったやつは誰か聞いてくれないか？』

リムル『よくわからんがわかった』

リムル「リグル、ちよつと聞きたいんだけど、お前の兄さん誰に名付けてもらったんだ？」

リグル「兄の名付け親ですか？それでしたら、通りすがりの魔族の男に付けてもらいましたよ」

リムル「ほう、魔族がゴブリンの村に来たのか？」

リグル「はい、数年前のことです。自分がまだこどものころに村に数日滞在して、兄に見所が有ると言っていました」

リムル「へエ、いい兄さんだったんだらうな」

リグル「はい！自慢の兄でした。その魔族ゲルミュツド様も、いずれは自分の部下に欲しい！そう仰ってくださいましたほどです」

そう言う話を聞きながらリムルは、

リムル『ムツキこれ聞いて何がしたかったんだ？』

ムツキ『ゴブリンに名付けるなんて、お前みたいなバカぐらいだろ』

リムル『バカとはなんだ』

ムツキ『そんなことわどうでもいい、俺が言いたいのは、なんで魔王軍とか言う奴らの配下がそんな周りくどい方法取るんだよ』

リムル『それもそうだな、なんでなんだ？』

ムツキ『なんでも俺に聞くなよ、今は教えてやるがお前はこれからリーダーになるんだからこれくらい自分で気づけ、俺の予想はだなお前の知識のないにあった蠱毒の呪法に近い方法をとってるんじゃないか？』

リムル『悪いもつとわかりやすく言ってくれ』

ムツキ『はあ、要するにな他に名付けを行い』

そいつら同士に殺し合わせて最後に残った奴を魔王種にして支配しようと企んでるんだらう』

リムル『なんでそんなことがわかるんだ？他に名付けをしてるって確証がないのに』

ムツキ『まあ確かにその指摘はごもつともだ、だが俺がその魔王でゴブリンに名付けをする理由は、ユニーク個体のスカウトか本当に食い合わせるかだ。それにあくまで関わっているのは部下いざとなれば切り捨てることができる他のところから文句が出てきても問題ないようにしているんだらう』

リムル『ひどいな、てか他に魔王がいるって思ってるんか？』

ムツキ『はあ今の時代の魔王の定義は知らんが俺の定義は覚醒したやつのことを指してる。そして俺の直属の七十二柱の最低ラインが覚醒魔王になってる。滅多に起きないがそれでも一人や二人いてもおかしくないだろ』

リムル『なるほど』

そう話しながら進み数日後、ドワーフ王国に到着した

門には行列ができていた。天然の大洞窟を塞ぐように設けられた大門、この大門が開くのは軍の出入りの時のみであり、月に一度あるかどうかだそう。残念だが、今回は閉まっていた。その大門の下に小さな出入り専用の門が設置されており、普段はそこを利用されているようだ。そうしてリムルたちが列に並んでいると、

モブ「オイなんか魔物が並んでいるぞ」

モブ2「ここで仕留めたら誰にも文句言われないんじゃないか？」

モブ「オイお前らその場所譲れそれから荷物も置いていけそうしたら命は助けてやるから」

とそう言って意味不明な要求をしてくとムツキが

ムツキ『少し、体の主導権かせリムル』

リムル『いいけど無茶するなよ』

ムツキ『任せろ』

そう言って主導権が変わると

モブ「どうした怖くって何もいえないのか」

ムツキ「お前らまだ状況に気付いてないのか？」

モブ2 「ハン何がだ」

ムツキ 「あっち見てみるよ」

モブ 「あっちがなんだよ」

そう言ってみると全ての人間が動きを止めていた

モブ&モブ2 「どうなってやがる!?!」

そう言つて振り向くとそこには金色の長髪の少女にも見える男が立っていた

モブ 「お前スライムだったんじゃないのか」

ムツキ 「いつから俺がスライムだと錯覚していた」

そう言い放つとモブたちが一斉に怯え出し魔法を発動させようとするが一切発動で

きない

モブ2 「なんで魔法が使えないんだ!?!」

ムツキ 「時間停止空間じゃヴェルダが作った例外の魔法以外発動できないぞ」

そう言いながらスキル威圧を使いながら男たちに近づく金髪もといムツキ

ムツキ 「ほんでこれがその例外の魔法な、凍て尽くす氷河之青」

そう言うのと周りが一斉に氷だし男二人と時間が止まってる影響で動いていないが、先

程この男たちとアイコンタクトを取っていた者たちも氷漬けにした

ムツキ 「余裕だったな」

リムル『時間停止とかチートだろ』

ムツキ『これぐらい余裕つつうの』

リムル『てかその姿なんだよ』

ムツキ『俺の本来の姿を模した姿だ。まあ疲れるけどな』

そう言いながらムツキは氷像になったものたちを少し離れた森に転移させ
焼き尽くす灼熱之赤で溶かしそのまま放置した

そして自分がいた場所に戻り時を再始動させたのだった

奈々話

リムル達は、長蛇の列を並び終えてドワーフ王国に入国した。

リムル『なあ、もし俺のこと疑われた時、どうすればいいんだ』

ムツキ『はあ、よくわからないがとりあえず設定自分で考えろ』

リムル『ムツキも手伝ってくれよ』

ムツキ『だったら、僕っ娘の、変身魔法兼幻惑魔法の天才少女。悪い魔女に呪いを解くため旅に出ている』

リムル『なんでそんな設定になったんだよ!』

ムツキ『ノリ、この話はこれで終わりな』

リムル『ちよつとまで、俺少女になつてるぞ』

ムツキ『お前無生だろ問題ない』

そんなことを話していると、ゴブタとドワーフの兵士がぶつかつた。

兵士「すまねえ今急いでたんで悪かつたな」

ゴブタ「大丈夫つすよ」

リムル「どうしたんですか？」

兵士「スライムが喋った!?!いや今はそんなこといいか、知り合いがアーマーザウルスに怪我をさせられちまって」

リムル「ならこれいりませんか？」

そういうと、リムルは、胃袋から樽を一つ取り出した。

リムル「これは掛けてよし飲んでよしの回復薬使ってくれ」

兵士「なんかよくわかんないけどありがとう、一様もらっていくぜ」

そう言つて樽を持って走つて行つた。

ゴブタ「よかつたんですか？リムル様」

リムル「別にいいんだよ」

そう言つてしばらく彷徨つていると、

リムル「詰め所の前か道に完全迷つてるし兵士の人にでも道聞かか」

詰め所に入つて行こうとした時

兵士「お前さっきのスライム」

リムル「あつさっきの兵士の」

兵士「あの回復役もらつて助かつた何か俺にできることなら言つてくれ」

リムル「それならちよつと頼みがあるんだが」

とテンポよくご都合主義みたいにどんどん話が進んでいき。

話を進めていきながら歩いているとある店に着く

兵士改カイドウ「おい、兄貴いるかい？」

そう言いながら店に入る

リムル「お邪魔しまゝす」

ゴブタ「どうもつす！」

と言いながらリムル達も続いて店に入る

×??「あ!!」

??「どうした？お前ら知り合いか？」

??「カイジンサさん、このスライムがさつき俺達に回復薬をくれて助けてくれたのが」

カイジン「おお、さつき話してたスライムか！こいつらを助けてくれたそうだな、感

謝する」

リムル「いやいや、それほどでもあるような、ないような？はっはっはっはっはー！」

ムツキ『調子乗るな(怒)』

リムル『あっはい』

カイジン「それで、どうして今日はここへ？」

そう聞かれたのでリムル達は説明すると

カイジン「話はわかった。だが、スマン。力になれそうもない……。実はな、こつち

もとある国から依頼を受けてな……」

その話を聞き

ムツキ『どこにでもいるもんだな無能な王は、こつちもせわになるんだし、少し肉体をかせリムル、その問題俺が解決してやるよ』

リムル『どうやって解決するんだ』

ムツキ『見てたらわかる』

そう言つてリムルから肉体を借りて

ムツキ「武器創造」
ウエボンクリエイト

そういうと地面から魔法陣が描かれて、カイジンが必要な武器ができていた。

八羽

武器を作ったリムル達はカイジンのお礼として、飲み屋に来ていた。

ムツキ『でなんでこんな店なんだ？』

ムツキ達がきたのは夜の蝶と言うエルフの女の子がしてる店、リムル曰く男のロンマンの店だそうだ、ちなみにシキ（作者）はこう言う店に一切興味ないどころか、下ネタとかが大っ嫌いである。純愛者だ。

それはさておき

リムル『別にいいだろ、なんやかんや言ってお前もこう言う店に興味あったんだろー』
ムツキ『いや、微塵も興味ない、まず俺に人間性の9割9分9厘溝川に捨ててきた。残ったものは知識欲だけだ』

リムル『なんかごめん』

ムツキ『オイなんで憐憫の眼差しを俺に向ける、俺は憐憫之獣じゃないぞ』

リムル『ムツキ、その憐憫之獣って？』

ムツキ『ああ、昔俺とヴェルダが本気で封印した、三大魔獣の一体、不死鳥の獣フェリクス、ヴェルダの魔素溜まりから生まれたやつでな結構厄介なやつだった』

リムル『ムツキでも厄介なのか？』

ムツキ『ああ、世界ごと滅ぼす以外の倒す手段は俺にはないな』

リムル『さらつと世界を滅ぼせるって言ったぞムツキ』

ムツキ『それぐらいは余裕だ』

リムル『後ヴィルダって誰だ？』

ムツキ『ヴィルダは俺の無二の親友基星王竜ヴェルダナーヴァ、世界を生み出した始
まりの竜種だ』

リムル『お前の交友関係おかしいだろ』

そうして、心の中でムツキと話しながら表ではカイジンと大賢者を利用して会話をし
ていた。能力の無駄遣いである。そうしていると店にとある男が入ってきた。

ムツキ『何だあの見るからに権力に取り憑かれたようなドワーフわ』

ドワーフ「おやおやカイジン殿、こんなところに下等魔物を連れ込むとはいけません
ね」

喧嘩越して話しかけてきた。

ドワーフ「おい、女主人！この店は、魔物を連れ込んでる奴がいるんだがいいのか？」
ママさん「い、いえ、魔物といっても、無害そうなスライムですし……」

ドワーフ「はあ？魔物だろうが！違うのか？このスライムは魔物ではないと抜かすの

か!？」

ママさん「いえ……：：： そういうわけじゃないんです、決して……：：：」

カイジン「まずいな……：：： 大臣のベスターだ」

ママさんがのらりくらり怒りを逸らそうとしていたが、

ベスター「ふん！ 魔物には、これがお似合いよ!!」

そう言つてリムルに酒をかけてきた。

カイジン「おい、リムルの旦那に何しやがる!」

そう言つてカイジンがベスターを、思いつきり殴つた。

カイジン「リムルの旦那、腕のいい職人探してたよな？ 俺じやダメか？」

リムル「その言葉が聞きたかつたぞ！ こちらこそ頼む、カイジン!」

そのあと全員で牢屋に入れられて待機することになった。

久和

そして裁判が始まった。えっ早いってこれ書いてる時シキの頭が痛かったのと早くストーリーを進めたいという思いが合致して牢屋での話はカットになりました。

そしてドワルゴンの王ガゼルドワルゴンの元へと連れていかれた。

ムツキ『こいつ、読心系のスキルを持つてるな』

リムル『どういふことだ』

ムツキ『要するに相手の心を読めるんだよ、だからこの裁判でも間違えなく相手を有罪にできるんだよ』

リムル『そうなのか？じゃあこれも読まれてるのか？』

ムツキ『それは問題ない俺の究極能力があるから通常のユニークスキルじゃあ通用しない』

リムル『改めて規格外だな、てかなんか俺たちの弁護士めつちや虚言吐いてるんだけど』

ムツキ『どうせ俺たちは解放される。されなかつたら俺の魔法で吹き飛ばす』

リムル『怖!?!』

そう話しているとムツキの読み通りリムルたちは開放されたその代わりにドワルゴンへの入国を禁止された。

裁判終了しベスター断罪後

ガゼル「ザガンよ貴様も見ていたのだろ」

ザガン「カツカツカツさすがにガー坊でも手前の気配にきずいたか」

ガゼル「ガー坊はやめろ、もし俺がベスターを断罪しなければ貴様ベスターを殺していただく。それについて聞きたいのだが」

ザガン「カツカツカツそこまできずいていたかならば答えよう、彼奴は、手前にとって命よりも大切な御方に手を出したただそれだけよ」

ガゼル「何!? 貴様にとっての命よりも大切な者と言えば最古にして最強、原初の調停者にして世界の支配者ムツキのことか!」

ザガン「さあ手前にはまだわからんな、だがあのスライムからあの御方の気配を感じた手前達が待ちに待った唯一の手掛かりかもしれないぬ者、彼奴にもしものことがあれば手前は自分を制御できる自信はないぞガゼルよ」

それと同時に英雄覇気を放ちガゼルを威圧した

ガゼル「あのスライムの重要性がさらに上がったな」

ザガン「そういうことだ手前久々に今生きてる72柱を集めるガー坊は、あのスライ

ムを見張っておいてくれ、だが下手に近づけさせな、あの御方が関わってる以上下手したらこちらが被害出る、手前もこの国に思い入れがあるから滅びられても困る」

ガゼル「心得た」

そしてこの場での話し合いが終わった

そしてリムル達は国を出て行って待っていた仲間たちと合流した時後ろの方から

ゴブタ「待ってくださいーいリムル様」

と間抜けな声を出しながら牙狼族の一体に乗って走ってきたゴブタが来た

ムツキ『あいつ以外に才能マンだな、俺が自由になったら稽古つけてやるか』

リムル『ゴブタ南無』

ムツキ『とりあえず俺の魔法で帰るぞ』

リムル『へっ? どういうことだ?』

ムツキ『転移魔法で飛ぶだけだ一瞬で着く行くぞ』

リムル『ちよつと待っ』

ムツキ『転移』

そうしてリムル達は自分らの村に帰ってきた

運命の時は近い

受泡

全員で戻ってきた、自分の個人スペースに戻ってきてから

リムル『おいムツキ、いきなり転移しやがって大変だったぞ』

ムツキ『いちいちまた何日もかけて走るより楽だろ、それに転移魔法お前が使えることになってるんだからいいだろ』

リムル『うぐ、文句を言いづらいところを言うな』

ムツキ『こんぐらい話術は身につけとけよ交渉とかに使えるからな』

リムル『わかったよ、うん？なんか話題変わってないか？』

ムツキ『気のせいだ(チヨロ)』

リムル『そうか、それならいつか』

ムツキ『あとそれとあのドワーフ王国には間違いない俺の配下の一人がいるはずだ何かあればあそこ付近に逃げ込めばどうにかなるぞ』

リムル『マジで』

そう話したりしていた。そしてしばらく経つその間に起こった出来事は、前のようにカットします。作者^{シキ}、始末する

作者^{シキ}「これ前にもやったよね、てかさろそろ展開はやめたいから許して」

仕方ない作者^{シキ}ですね。仕方ない許してあげます。

起こった出来事は新たなゴブリンの仲間が増えたり森の上位種が覇権争いに動き出したなどの情報をリムルたちがもらったそう。そうしているうちに数日経ち街を散策していると、

リグルド「リムル様、ここにおられましたか」

リムル「リグルド、そんなに慌ててどうした？」

リグルド「不審者を捕らえたので報告に参りました」

リムル「不審者って例の上位種か？」

リグルド「いいえ、人間です」

リムル「なんで人間がこんなところに？」

リグルド「なんでも、巨大妖蟻ジャイアントアントの集団と戦闘中だったとかで、リグルの警備班が遭遇

し、そのまま救出、保護したんですがどうやら、この周辺の調査を行っていた形跡がありましたので判断を仰ごうかと思ひまして」

リムル「よし、会おう。そいつらのいる場所まで案内してくれ」

そう言つて案内されると

??「ちよ、ギド！これは俺が狙つてたやつ!!」

?? 「酷い！それ、私が育てていたお肉なのに！」

ギド 「旦那方、こと、食事に関しちや譲れないんですよ！」

?? 「もぐもぐ」

この光景を見、リムルは唾然とし珍しくムツキは大爆笑していた。何が面白いんやら。

リグルド 「どうやら荷物を蟻どもに荒らされてしまったらしく、ここ最近食事をしていないと言うものですから、用意していたのですが……」

リムル 「いや構わない、寧ろよく気づいた。困った者には親切をしてやるのはいいことだぞ」

リグルド 「はは！今後とも、リムル様に迷惑をかけぬ様、精進したいと思います！」
そうして話しながら上座に向かいリグルドがリムルを降ろし

リグルド 「お客人達、大したもてなしは出来ないが、寛いでもらっておりますかな？
こちらにおられるのが我らの主、リムル様である！」

客人3人 「えっ？スライムが!？」

?? 「もぐもぐもぐ」

3人が驚いている中一人おかしな反応をしている。

リムル 「初めまして。俺はスライムのリムル。悪いスライムじゃないよ！」

ムツキ『なんだその挨拶は』

リムル『一回してみたかったんだよ』

ムツキ『バカだろ』

??「ブツ!!」

リムル&ムツキ『うけた!?!』

そしては作者は、力尽きた次回もつと進めたいそれが遺言です。

11話

??「これは失礼しました。まさか魔族に助けてもらえるとはおもってもいませんでした。助かりました」

??「私達は、人間の冒険者です。このお肉美味しかったです！この三日間、ずっと逃げ続けていたのでまともな食事取れなくて…… 本当にありがとうございます」

ギド「どうも、助かりました。こんな所でホブゴブリン達が、村を建築してるとは思いませんでした」

??「ゴホゴホ、ぐす。ゴックン」

リムル「ま、ゆっくり食事でもして、終わったら詳しい話を聞かせてくれ」

そう言つてリムルは自分専用のテントに戻つて待つことにした。

しばらくして四人がテントの中に入つてきた。

リムル「では、改めて初めまして。こここのリーダーみたいなことをしてるリムルだ。

ここ何しにきたのかな？」

??「初めまして、俺はカバル。一応このパーティーのリーダーをしてる。こつちがエレンでそつちがギドだ。言つてわかるかな？一様Bランク冒険者だ」

エレン「初めまして！エレンですう！よろしくね」

ギド「どうも、ギドと言います。以後お見知りおきを！」

カバル「で、こっちは人は道中が一緒ってことで臨時メンバーになったシズさんだ」
シズ「シズです」

リムル（この人性別どっちだ？）

ムツキ『女だな』

リムル『マジで、てか何でわかるんだよ』

ムツキ『人体について俺は知り尽くしてるからな見たらわかる』

リムル『ほんととお前なんでもありだな』

ムツキ『てかお前も調べたらわかるだろ』

リムル『プライベートがあるだろ』

ムツキ『まあいい話を続けろ』

リムル『お前か振ってきたんだろ、まあいいや』「これはご丁寧に。これでここで何しに？」

そう聞いたら意外にもあっさり話し出した。

カバル「でな、怪しい物とか言われてもさ、何が怪しいか何て俺たちにわかるわけないんだよ！」

エレン「そうよ！ちゃんと具体的に何を調べるか言つて欲しかったよね」

ギド「いくらあつしらが調査が得意だつていつても、限界があるつてもんでやす」

ムツキ『こいつらバカだろ』

リムル『言つてやんな』

ムツキ『まあ聞いている限りこいつらは問題ないな』

リムル『まあこんなペラペラ聞いてもないこと話すぐらいだしな問題ないだろ』

ムツキ『そうだな、自分がエルフだつて隠してるから気になつたが問題なさそうだな』

リムル『そうそう、つておい今何て言つた』

ムツキ『それより話に集中しろ』

リムル『後で聞き出すからな』「だいたい、この辺りつて怪しい物なんて洞窟ぐらいし
かないんじゃないのか？」

エレン「あそこは何にもなかつたんですよう。あそこには邪竜が封印されている、つ
て言われていたんですよねえ。でも、中で二週間も滞在して調査していたんですけど、
何もなかつたもん！お風呂入らずに頑張つて損じた感じだったよう」

カバル「おい、バカ！それは流石に言つちやダメじや話じやねえの？」

ギド「知りやせんぜ？話したのは姉さんなんですからあつしには関係ありやせんぜ
！」

リムル「あの洞窟を調査してたつて言うけど何であんなところに調べに行つてたんだ？」

カバル「もう言つてしまったもんは、仕方ねえ。実はエレンが言つてた通り、邪竜の反応がなくなつたつて噂になつてな、しかも、中の魔素が濃いつて話だつた反応石つてのを持つて行つてたんだが、思つてたほど濃度が低下していてな。今で普通の洞窟よりも濃度が濃いだけの洞窟になつちまつてる。魔素の濃度低下が異常と言えば異常だから唯一の調査結果なんだよ」

そのあともしばらく話は続いた

そのあと一応リムルは町を作っている途中の現状をギルド的に大丈夫なのか聞いてみたら、

カバル「大丈夫だろ？」

エレン「そうねえ、ギルドがなんか言つてくる問題じゃないしね。国の方はどうだろ？」

ギド「うーん、あつしにちよつとわかりやせんね」

そう話を聞いていると突然シズが倒れ

シズ「うぐつ、うわあああああー！！」

そう叫ぶと同時に仮面が割れとてつもない妖気が漂い出した。そうしておもむろに

シズが立ち上がり詠唱を開始する。

エレン「召喚魔法!？」

カバル「おいおい、まじかよ!突然どうした。でどのランクの召喚だ?」

エレン「多分、魔法陣の規模から予想してB+以上の魔物よ」

ムツキ『これなら^{サラマンダー}火炎蜥蜴と上位精霊のイフリートだな』

リムル『そいつらやばいのか?』

ムツキ『少なくともこいつらには勝てないレベルだな』

そうしてカバル達が動こうとした瞬間

カバル「まさか、爆炎の支配者?」

リムル「リグルド、なんかやばそうだ皆んなを非難させろ!この付近に近寄らせるな

!」

リグルド「しかし」

リムル「命令だ!避難を終えたらランガかカシムを呼んでこい!」

リグルド「はは!承知しました!」

リムル「おい、爆炎の支配者ってなんだ?」

エレン「それって確か五十年くらい前に活躍していた、英雄の一人よね?」

エレンがそう言うと同時にシズから仮面が落ち周りを吹き飛ばした。それと同時に

空中に三体の火炎蜥蜴サラマンダーが召喚された。

《ユニークスキル『変質者』を発動します》

周囲に世界の声が響いた。

同時にシズさんの姿は炎の巨人へと変質していった。

ギド「やつぱり。間違いないでやんす、あれこそが爆炎の支配者、イフリートを使役する、最強の精霊使役者でやんす」

ムツキ『リムルさっさと仕留めろ。あいつイフリートを誰かに無理矢理受肉させられてるイフリートと肉体の主導権を奪い合ってたんだろ、時間が経ち抵抗力が落ちてとうとう暴走してしまってる。早く楽にしてやれ』

リムル『助ける方法はないのか、てかお前なら何か絶対にあるだろ！』

ムツキ『勘弁しろよ、はあわかった、今回だけだ肉体の主導権を寄越せ、俺があいつら全員仕留めてシズを助けてやる』

リムル『頼む』

ムツキ『はあ、任せろ』

それと同時にランガが来て

ムツキ「ランガ、あの人間達を守れ頼むぞ」

ランガ「かしこまりました。」（少し主と違うような、いや今はあの人間を守らなければ

ば)

ムツキは一気に飛び上がり

ムツキ「氷結景色」
アイシグルダスト

そう言うのと火炎^{サフランダ}蜥蜴達が一気に凍りつき砕け散った。

エレン「嘘!?!火炎^{サフランダ}蜥蜴が一撃で」

イフリートは即座にムツキに向かつて炎を吐き出し攻撃したがリムルの肉体には熱変動耐性があり攻撃を無視しイフリートにタツクルすると同時にイフリートのみを捕食者で食らい胃袋に隔離した。

そしてあっさり問題を解決した。

問題が解決し一週間が経ったその間にカバル達にポーシオンや装備などを与えたりして滞在できる期間がなくなりシズさんのことを任せ、帰っていった。

シズ「ここは?そうか、迷惑をかけたね。夢を見ていたよ。懐かしい夢。もう二度と戻れない、昔住んでいた、町の夢を、ねえスライムさん。君の名前は、何て言うの?」

リムル「リムルだ」

シズ「君の本当の名前を教えてくださいませんか?」

リムル「しょうがないな、どうせ長く無い。教えるよ、三上悟だ」

シズ「やっぱり同郷者だったんだね。そうじゃないかと、思ってたんだよ。雰囲気か、

ね、私の生徒達にも聞いたんだ。綺麗な街になったんでしょ？あの、周りを見回しても火の海だった、町が」

リムル「ああ。何なら、見せてやるよ」

そう言つて『思念伝達』でリムルの記憶にある町の風景を映し出した。

それを見てシズは涙を流し

シズ「ねえスライムさん、いや悟さん。お願いがあるの、聞いてくれないかい？」

リムル「何だ？」

シズ「私を食べてくれないかい、私にかけられた呪いを、食べてくれたんだらう？嬉しかったよ。私に呪いをかけたやつにどちらにせよ、私には無理だけど、文句を言つてやりたかったんだけどね。最後のお願いだ、君の中で眠らせてくれないかい？私はねらこの世界が嫌いなんだ。それでも、この世界が憎めなかった。まるで、あの男のようだ。この世界に、あの男を重ねて見ているのかもしれないね。だから、この世界に取り込まれたく、ないんだ。お願いどうか、私を食べてくれないだろうか」

リムル「いいよ俺が食べて　ムツキ「却下だ」」

リムル&シズ「えっ」

シズ「誰？」

ムツキ「リムルの中にいる者だ。お前の願いは聞き届けない」

シズ「そうか」

リムル「おい、それを決めるのは俺だろ」

ムツキ「関係ない、この世界を嫌いなまま死なせない、だから俺はお前を助ける、この世界は俺の親友である星王竜ヴェルダナーヴァが生み出した世界であり、この世界の最初の調停者である俺がお前のそんな死を認めない」

シズ「でも私の命は」

ムツキ「そうだな、イフリートの肉体の主導権争いで魂が消耗している。ならリムルのスキルの胃袋の中でしばらく休めばいい、その間にお前がしたかったことも俺たちがしといてやる。だからこの世界を好きになれとまでは言わないがこの世界にこれを楽しかったって心の底から思ってから死ね」

シズ「ふふふ、あなたはこの世界が好きなのね。まるで竜玄さん見たい」

ムツキ「当然だ、じゃなかったら調停者になんかならない」

シズ「わかった、あなたのこと信じて見るわ」

ムツキ「任せろ、てことでシズを胃袋に入れろリムル、あとはこっちで魂を保護する。あと多分肉体情報とか解析されるけどその文句は聞かないからな」

シズ「わかったわ」

そうやってシズはリムルの胃袋の中に入りしばらく眠ることになった。

リムル（竜玄ってあのカードショップの店長のことかな？）

呪愛庭

シズを胃袋に保護してしばらくして

リムル（うーん、竜玄つてあの人のことかな？あの人ならあの時代に生きててもおかしくないけどな？）

ムツキ『どうしたリムル、悩み事か？』

リムル『いや、シズさんが最後に言つてた竜玄つて人を俺が知ってる人かなって思つて』

ムツキ『ふーん、どうでもいいや』

リムル『オイ』

ムツキ『そんなことより、シズの肉体の解析が終わったから人間の姿になれるぞ』

リムル『その言い方止めろよ、めっちゃ罪悪感が湧いてくるだろ』

ムツキ『やれやれ、とりあえず封印の洞窟に転移するぞ、シズの変質者ウツロウモも解析終了したみたいだしな』

そう言つて二人は封印の洞窟に転移した。

リムル「さて、へーんしん」

そう言いながら人形の姿に変わった。その姿はシズさんの身長下げて髪の色をムツキが一度見せた姿とは真逆の青みがかかった銀髪である。

ムツキ『なあふざける必要あるか』

リムル『気分の問題だ気にするなよ』

ムツキ『とりあえず俺が物質創造で服を作るぞ』

そう言つて黒色の服装を作り上げた

リムル『これで動きやすくなつたな』

ムツキ『さて、今からはスキルの勉強の時間な』

リムル『いやなんでだよ』

ムツキ『変質者ウツロウモフを利用して面白いことができるからな、そのためにもスキルについ

て勉強しとけ』

リムル『わかつたよ』

ムツキ『てことでまずユニークスキルと究極能力アルティメットスキルの違いからだな』

リムル『いきなりだな』

ムツキ『ユニークスキルは簡単に言う魔法を本人がいつでも使えるようにした物

だ』

リムル『マジで！』

ムツキ『究極能力アルティメットスキルはそれをさらに強化した法則制御装置だ』

リムル『あのもう理解できないんだけど』

ムツキ『簡単に言えば究極能力アルティメットスキルはなほとんどがヴェルダが形を作り上げたものを近しいユニークスキルを持つてるやつが進化する時にその枠に当て嵌めて手に入れるものだ。例外はあるけどな』

リムル『へエ〜そうなんだお前の魔導ソウ之賢王モンもそうなのか？』

ムツキ『いい質問だリムル、俺のスキルは例外中の例外、世界の言葉に干渉して生み出したスキルが俺と俺の配下の殆どの究極能力アルティメットスキルだ』

リムル『はあ、自分で作ったのか』

ムツキ『作ったってより自然と創られたって方が正しいな配下のは干渉したけど』

リムル『デタラメ、デタラメって言ってきたけどもうそう言う次元の話じゃないな』

ムツキ『さて話を戻すが俺の例外を除いて究極能力アルティメットスキルは、ヴェルダが作ったものだ。俺がヴェルダと一緒に作ったものもあるけどな。次の話は天使系、悪魔系について話すぜ』

リムル『それってどう言うことだ？』

ムツキ『お前の知識にある悪魔や神の使いとやらと同じ名前を持ったスキルが存在する。基本天使系は防御系が多く、悪魔系は攻撃系が多い、その中でも他のものよりも強力なスキルが存在する。それが大罪系と美德系のスキルだな』

リムル『そんなのまであるのかよ』

ムツキ『そうだな、それにこのスキルをそれぞれ揃えるとな面白いことになるぜ』

リムル『なんだよそれ』

ムツキ『大罪系を揃えるとな悪魔はな、物質界であるここに来ても制限が掛かるんだがその制限を外せる。逆に美德系を揃えるとな天使達の自由意志が解放される。まあ受肉したらずぐ解放されるけどな』

リムル『なんでそんな制限がかかるんだ？』

ムツキ『あいつらこつちに来たら、暴れるからな制限かけねえと世界が吹っ飛ぶ』

リムル『うげ、絶対妨害しないとな』

ムツキ『ちなみにお前の捕食者、下手したら暴食のスキルになる可能性あるからな』

リムル『なんで！』

ムツキ『知らん、俺の勘だ』

リムル『他に持つてそうな奴は誰なんだ？』

ムツキ『入れ替わりがある可能性があるが傲慢が原初の赤^ルつてやつが持つてるな、あと数百年周期に生まれる豚頭帝の飢餓^{ウエルモノ}者が暴食の系統に属してるぞ。あとは正義がヴェルダが持つてるな、俺が持つてる屋屑^{ウエルダナーヴ}之神を使えば一様俺も正義^{ミカエル}之王^{エル}を使えるな』

リムル『お前でもそんだけしか知らないんだなつてかさらつとお前が正義使えるみた

いなこと言ってるしそれに星屑之神ヴエルダナーヴァってなんだよ」

ムツキ『まあ昔あいつと半年間殴り合ってた最終的に引き分けたんだが、その際親友になつてな魂の回路を繋げたんだ。そうしたら究極能力星屑之神アルティメットスキルヴエルダナーヴァが生まれたんだ。このスキルのおかげでなお互いのスキルを貸し合ったりできるようになった』

リムル『あつはい、そうっすか、じゃあ俺とヴエルドラも復活したら同じことになるのか?』

ムツキ『多分なるぞ、まあ100年ぐらい先だろうけどな』

リムル『やっぱそんなぐらいかかるか』

ムツキ『当然だな、まあ星屑之神ヴエルダナーヴァは半分封印されてる状態だけだな』

リムル『なんでだ?』

ムツキ『ヴェルダの魂が俺がこの世界にいない間に碎けた影響で魂のかけらが散らばって復活できなくなつたんだ。本人がいらない影響でスキルのほとんどに制限がかかってる』

リムル『例えば?』

ムツキ『星王竜召喚とか竜人一体化ドラゴノイドボディとかが制限受けてるな』

リムル『物騒すぎだろそのスキル封印された方がいいだろ』

ムツキ『まあいい新しい肉体が見つかったらヴエルダの魂の欠片を集めて復活させる

しな』

リムル『あてはあるのか？俺もそのヴェルダナーヴァ復活協力するぞ』

ムツキ『あてならある、俺はあいつの本体と呼べるあいつの心核と5%の魂の欠片を持つてるからな』

リムル『5%って少ないなお前が持ってたのか？』

ムツキ『リムルの中にあつた奴を拝借しただけだぞ』

リムル『ヘエ〜そうなんだ。はあ？えつちよつと待て！なんで俺の中にそのヴェルダナーヴァの魂の欠片があるんだよ！』

ムツキ『あくまで仮説だがお前はヴェルダの転生体の一つだろうな。だからお前は魂の欠片を持っていた。ついでに言うとう人間の男の魂と女の魂そのものも混ぜつてたなついでだあとで変質者^{ウツロウモ}使つて分離してみろ』

リムル『ちよつと待てえー俺に衝撃の事実打ち明けてそんな適当に扱うな』

ムツキ『変質者^{ウツロウモ}はな相反するものを統合したり逆に分離したりできるスキルみたいだぞ』

リムル『無視すんな』

住SUN輪

リムル『でっとう言うことだよ』

ムツキ『分離してから本人に聞けよ、俺もしらねえし』

リムル『チツわかった』(大賢者ムツキが言つてたこと頼めるか?)

大賢者(解 個体名リムル||テンペストの魂にある魂を^{ウツロウモノ}変質者で分離していきます)

ムツキ『ちやつかり自分のスキルに頼るなよ』

リムル『俺の力には変わりないだろ』

ムツキ『まあそうだな、だがそれに頼りすぎるなよ。いざつて時のタイムラグになる

基本は補助としてだけ使つとけ、同時に何かするときだけ頼れよ』

リムル『わかったよ』

大賢者(個体名 リムル||テンペストの魂の分離を完了しました)

??『あれ?私つて死んだはずじゃ』

ムツキ『目覚めたみたいだな?』

??『あなた誰!今どう言う状況!』

ムツキ『人に聞く前に自分が名乗れよ、全く俺はムツキだ』

リムル『目覚めたらいきなりこんな状況混乱するのは当たり前だろ、俺は』
??『ヴェルダ！よかった生きてたのね』

リムル『悪いけど俺ヴェルダナーヴァじゃないんだ、俺はリムルⅡテンペストよろしく』

??『えっそうなの、あつ私はルシア、ヴェルダの妻よ』

ムツキ『は？、マジで』

ルシア『本当よ後そろそろ状況教えて欲しいのだけど』

ムツキ『リムルパス、俺ちよつと頭整理してくるわ』

リムル『えっちよオマ、はあえつとじゃあ説明するな』

少女？説明中

ルシア『つまりさっきいた人が昔行方不明になった最高最前最大最強王が彼なのね』

リムル『どこの時の王者だよ！』

ルシア『それであなはヴェルダと私それにお兄様の魂の欠片を持って転生した存在なのね』

リムル『ムツキ曰くそうらしい』

ルシア『ひとまず理解したわ、これからよろしくね』

そう言った瞬間

世界の言葉〔個体名ルシア・ナーヴァと個体名ヴェルダナーヴァの魂の回路を確認しました。究極能力星屑之神を獲得成功しました。続けて知識之王の進化に挑戦、成功しました。知識之王は究極能力黄泉之主宰神に進化しました〕

ルシア&リムル『は?』

ムツキ『いやなんで星屑之神手に入るんだよ』

リムル『突っ込むところそこかよ』

ムツキ『いやだって、頭の整理がてらルシアのスキルいじってたらなんか進化したんし』

ルシア『何勝手に人のスキルいじってるのよ!』

ムツキ『頭の整理のためだが』

リムル『だめだこいつ早くどうかしなきゃ』

ムツキは本来リムルにやらせるはずだったスキルの統合でとんでもないこともしていた。そう話していると

ムツキ『どうやら、ランガ達が誰かと戦ってるみたいだな』

リムル『マジか助けに行くぞ』

そう言つてムツキの魔法でランガ達の目の前に転移して周りを確認すると

ゴブタ「ぎゃー、切られたっす、死んじやうっす」

元気に転がりながら叫んでいた。

リムル「落ち着け、傷は浅いぞ」

ゴブタ「あつリムルさまじゃないですか。オイラが心配になって来てくれたんすね
!？」

リムル「ああ、そうだな。そんなに元気なんだし、回復薬はいらなみたいだな」

ゴブタ「ちよつと待って欲しいです！冗談言つてすまなかつたすよ！」

リムルはゴブタに回復薬をかけ改めて敵を確認した。

十世環

敵を確認したらそこには、6人のオーガがいた。その中の紫のオーガとリグルが戦っていた。

ランガ「リムル様、申し訳ありません。我がいながらこのようなことになってしまつて」

リムル「別にいいよ、今回は相手が悪すぎたからな、次しつかりしろよ」

ランガ「了解しました」

そう言つてリムルの方に向かい

リムル「争うのをやめろ」

そういう時リグルが気付き、即座に剣を下ろした。紫のオーガはリグルに追い討ちをかけるんじゃない、リムルの方を興味深そうに見つめてきた。

ランガに命じてリグルを回収する様にめいじた。

リグル「り、リムルさま、申し訳」

リグルは満身創痍で息も絶え絶えだった。

リムル「安心しろ。あとは俺がやる、お前はゆつくり休め」

そう言つてリグルに回復薬をわたしてやった。

ムツキ『先に言つとくが魔法であいつらは眠らされてるだけだからな』

リムル『了解』

リムルは改めて相手を観察する。

数は六体。

落武者のような格好をしているものの身なりはしつかりしている。

観察していると桃のオーガが

桃オーガ「なんと邪悪な魔物でしょう!?!皆の者、気をつけるのです!」

と叫んだ。

リムル「おいおい、ちよつと待て、俺が邪悪な魔物だと?」

そう聞き返すと

桃オーガ「しらばつくれるつもりか?その邪悪なるもの達を使役するなど、普通の

人間にできる芸当ではない。見た目を誤魔化せてし妖気オーラも抑えてるようだが甘いわ!!

我らを騙せると思つたか!?!」

黒オーガ「姫様の目は欺けぬぞ、正体をあらわすがいい!」

白オーガ「黒幕から出向いてくれるとは、好都合、少人数ならば、我らにも勝機はあ

る。」

と桃のオーガに切り捨てられ、黒と白のオーガが口々に同調して叫んだ。

それからしばらく、誤解だと説明したが聞く耳持たず果てには

赤オーガ「もういいだろう。素直に話す気にならないなら、力尽くで喋らせてやろう。

我ら同胞の襲った、あの邪悪なる豚共との関係をな!!」

赤のオーガが怒気を放ちながら叫んだ。

ランガ「リムル様、どういたしますか?」

そう聞いてくると、

リムル「ちよつと待て、考えるから」

そう言つてムツキ達に一旦相談した。

リムル『ムツキどうする?』

ムツキ『手っ取り早く喰えば? エネルギにはなるぞ』

ルシア『誤解でこんなことになってるんだから可哀想でしょ』

ムツキ『勝手に誤解したあいつらが悪いだろ、それともリムルはあいつらのこと殺せ

ないのか?』

リムル『いや、最終手には殺ることはできるけどなさつき言つてた、邪悪なる豚共つ

てのが気になつてな』

ムツキ『ふむ、それは気になるが俺ばつかに頼るのもダメだ。お前の成長の為にも今

回はお前がやれ。ルシアも手を貸すなよ』

ルシア『わかったわよ』

リムル『そういえばムツキがまえ使ってた凍ヨて尽ツくす氷河ヘ之ム青ムつて俺に使えないか？』

ムツキ『無理だな使えばお前ごとこの森林が氷の世界になる』

リムル『そうか』

大賢者（告）凍ヨて尽ツくす氷河ヘ之ム青ムは使用はできませんが下位互換である氷河アイスエイジ之ム時代ジは使用可能です使用しますか？YES / NO）

リムル『そうか！わかったイエs いやまて俺が自分で使用する補助してくれ』

大賢者（了）

ムツキ『ちやんと俺の言いつけ守ってるな』

リムル『ランガ下がってる少しあいつらの頭を冷やすから』

ランガ『ハツかしこまりました』

赤オーガ『俺たちの頭を冷やすだと、ふざけたことを抜かすな！』

そう言つて、全員で斬りかかった瞬間

リムル『氷河アイスエイジ之ム時代ジ』

そう言つて手を前に出すとオーガ達の足元を凍らし下半身を完全に固定した。

桃オーガ「馬鹿な、こんな規模の大魔法を詠唱もなく一瞬で！」

リムル「俺は戦う意志は無い、改めて俺たちの話を聞いてくれ」

赤オーガ「そんな言葉信じられるか！」

桃オーガ「お兄様、冷静になって考えてください、こんな大魔法を無詠唱で発動できる方が姑息な手段を用意で、豚共に我等の里を襲撃されるなど不自然です。この方の言う通り我々の勘違いだと思います」

赤オーガ「なんだと!?!だが言われてみれば」

リムル「だから最初っから誤解だつて言ってるだろうが！まったく少しは人の話を聞く気になったか？」

赤オーガ「申し訳ない。どうやら追い詰められ

かんちがいをしていたようだ。どうか謝罪を受け入れてほしい」

リムル「まあ、ここで話すのもアレだし一先ず村に戻ろうか。お前達も来いよ、飯ぐらい食わせてやるから」

そう言つて指を鳴らすと氷が砕けオーガ達を解放した。

集期過ン

オーガたちを村に連れてきてから宴が行われた。

リムルは味覚を手に入れて初めての食事は大変美味しかったそうです。

翌日

改めてオーガ達に話を聞くと、オーガの里で戦争が起きそしてオーガ達は敗北してしまつたようだ。

赤オーガ「奴らは、いきなり俺達の里を襲撃してきた。圧倒的戦力で……。奴等、あの忌まわしき豚共、豚頭族め!!」

血を吐くような怒りを込めてそう叫んだ。

リムル『ムツキこんなことってあり得るのか?』

ムツキ『例外を除けばまずあり得ないだろうな』

リムル『例外って?』

ムツキ『豚頭帝オイクロイドが出現だなあとはお前みたいにユニークスキルを持った特殊個体が生まれるか、今回の場合は俺の勘だが豚頭帝オイクロイドが生まれたんだらう』

リムル『そいつやばいのか?』

ムツキ『やばさで言えばお前以下だな、だが軍を率いてるなら話は別だ、あいつらはお前みたいに一回喰えばなんでも獲得できるみたいなことではできないが配下が喰らったものからスキルや体の特徴を再現するスキル【飢餓者】^{ウエルモノ}を持っている、俺の72の配下の一人にも元が豚頭帝^{オイクロト}がいたからな今のお前だと五分五分つてとこだぞ』

リムル『やばそうだな』

ムツキとリムルが話しているとどうやら普通の個体より巨大な豚頭族^{オイク}黒い鎧を着て異様な妖気^{オイヤ}を放っていた者と凶悪な妖気^{オイヤ}を隠そうともしない、怒った顔の道化のよいうな仮面をつけた人物^{オイク}がいたそうさ。

桃オーガ「あれは間違いなく魔人でした。少なくとも、お兄様でも勝つことができないほどの、上位魔人です」

白オーガ「ワシらが勘違いしてしまったのは、その者を見ていたからなのですじゃ。貴方様もてつきり奴等の仲間なのかと……」

そして話は続き他にも黒い鎧を着た豚頭族^{オイク}に匹敵する個体が他にも三体いたそうさ。その四体に里の精鋭である戦士が皆殺しにされそしてその隙に豚頭族^{オイク}の兵が雪崩れ込み、蹂躪されたそうさ。その数は数えたわけではないが少なく見積もっても数千は居たそうさ。

てか作者いつまでこんな細かいとこ書いてるんですか？もうこんなところちやつ

ちやと飛ばして下さい

作者「^{シキ}???'さんも久しぶりに出すために突っ込まれるようなことしただけだよ」

「^{シキ}そんなことする暇あるならさっさと話進めて正式に本編に出させてください
作者「^{シキ}努力します、てことでカット」

カットされた話の内容は、魔王の干渉があるかもとか推測が飛び交っていた。

そしてリムルはオーガ達に豚頭族^{オグ}討伐を協力する代わりに一時的に配下になると言う取引をした。

銃6把

無事にオーガ達も仲間に加わりリムルは又名付けを行うようだ。

リムル「よし！今からお前らに名を授けよう」

赤オーガ「はっ？一体何を？」

リムル「何をって、名前だよ、名前。無いと不便だろ？」

赤オーガ「いや、俺達は別に意思疎通できてるから不便では無いが」

白オーガ「ホホ、確かに人は名前を持ちますが、魔物には不要なものですな」

リムル「あほか。意思疎通できるから不要とか、お前らの意見なんて関係無いんだよ。俺がお前らを呼ぶときに不便だから必要だと言っててるんだよ」

ムツキ『理不尽の権化だな』

リムル『お前にだけは言われたくねえよ』

ルシア『待って、流石にオーガの複数に名付けるのはリスクが高すぎよ私は反対よ』

リムル『大丈夫、ムツキがどうにかしてくれるから』

ムツキ『また俺に投げるのかよ、ハアまあいいよ今回は豚頭帝戦オイクロードが控えてる以上戦力は必要だしな』

リムル『よしそうと決まれば早速』

そう言つてリムルはオーガ達の言葉を無視して名付けを行った。

赤髪のオーガに『紅丸』

桃髪のオーガに『朱菜』

白髪のオーガに『白老』

青髪のオーガに『蒼影』

紫髪のオーガに『紫苑』

黒髪のオーガに『黒兵衛』

そしていつも通り全員倒れてゴブリン達に休める場所まで連れていってもらつた。

ルシア『もう、リムルは魔王名乗つていいんじゃないの？』

ムツキ『覚醒してないのに魔王名乗るとか意味わからんこと言うな』

リムル『いやまず魔王なんて名乗らねえよ』

ムツキ『まあいい、で今から暇になるけど何するんだ』

リムル『そういえば豚頭帝が飢餓者ウエルモ持つてるとか言つてたよな』

ムツキ『そうだな、それがどうした』

リムル『それつてつまりまだ豚頭帝の上がいるつてことだよな』

ムツキ『察しがいいな、滅多に無いことだが、ごく稀に豚頭魔王オイクロイドに進化する可能性は

ある、俺の配下はそのさらに上だけだな』

ルシア『あなたの配下って魔王級しかいないの』

ムツキ『基本真なる魔王に覚醒してるぞ』

リムル『もうワケワカメだな、とりあえず豚頭帝オイクロトが現れたら速攻でかたをつけるか』

ムツキ（そうだな、こいつの成長のためにも俺が豚頭帝オイクロトに細工するか）

ルシア（絶対によからぬこと考えてるでしょこれ）

そしてしばらくするとオーガ達に戻ってきた

ムツキ『なあ、人の事言えないがなんでお前が名付けをすると全員進化するんだよ！』

リムル『いや、俺に言われても困るわ』

戻ってきた6人は全員人間に近い姿になっていた。具体的なのは皆さんが調べてみてください。

リムル『でも黒兵衛は他のみんなと違って普通そうでなんか安心だな』

ムツキ『何言ってるのこいつ』

そう話していると紅丸が跪き

紅丸「リムル様、お願いがございます！何卒、我らの忠誠をお受け取りください!!？」

リムル「ん？大袈裟なやつだな、別に傭兵とは言えそこまでする必要わないぞ？」

紅丸「いえ、そう言う意味では御座いません。我ら一同、家臣として召し抱えてほし

いのです！」

全員「二何卒、よろしくお願い致します二」

そう言われて断る理由がないのでリムルは全員を受け入れた。

⑩ 奈々技

リムルはとりあえずガルムに頼み紅丸達の服や装備を頼み黒兵衛に武器専門の刀鍛冶に任命した。

その他いろいろカット

作者が早くストーリーを進めたいみたいなので加速させます。

数日が経ち新しく仲間になった紅丸達は他のゴブリン達と仲良くやっているようだった。

いつのまにか朱菜リムルの巫女かんなぎ姫になっていたが

ムツキ『でいつなったんだ？』

リムル『俺が知るわけないだろ！』

その後は白老と紅丸の訓練を見たりムツキによる技術アイツ習得訓練が決定したり白老をゴブリン達の指南役に任命したり紅丸に侍大将を任せたり紫苑に武士という名の秘書をまかせたりした。私がいれば秘書の役なんていらぬのに

作者「シキ?????さん心の声漏れてますよ」

はっじまった今のは聞かなかったことで

紅丸達とリムルが話していると、紅丸の影から蒼影が現れ

蒼影「リムル様、報告がございます！」

リムル「おう、どうした」

蒼影「実は、帰還する途中でリザードマンの一行を目撃しました。湿地帯から離れたこんな場所までリザードマンが出向くのは異常ですので取り急ぎご報告を、と」

紅丸「リザードマンだと？解せんな」

そしてリムルは蒼影に隠密として諜報活動を目的とした役目を与えた。

それからさらに数日経ちリムルはムツキの地獄の技術習得訓練をしている。ムツキの訓練は白老よりも何倍もえげつなかつた具体的にいうとリムルの耐性などを強制的に切断し、体に無理やり叩き込み習得させた。（ちなみに万能ムツキでもムツキの配下が作ったある技術は再現できないようだ）ちなみにリムルは臍を習得した模様（練度は白老以下だが）そうして修行をしていると、大音声で鐘の音が鳴り響いた。これは蒼影が仕掛けていた警報である。

そしていつも通り走ってきたリグルドが

リグルド「大変です、リムル様。リザードマンの使者が訪れました！」

「どうやら厄介ごとがやってきたようだ。」

リザードマンの使者はまだ来ていない見たいだった先触れとして一人来ただけだっ

た。そしてわざわざ「村の総出で出迎えよ！」と偉そうに言つて去つていった。ムツキが暴れそうになつて止めるのに苦勞するリムルであつたまる

リムル「くれぐれも丁寧に対応してくれよみんな」

とみんなに話していると

紅丸「そういえば、紫苑はどうしました？」

と聞いてきたので

リムル「紫苑なら朝から俺の部屋の片付けをしてくれているはずだが？」

紅丸「な、何ですと!？」

リムル「おいどうした？そんなに驚くことか？」

白老「い、いや、何でもないですじや」

紅丸「そう、だな。紫苑も成長した事だし、多分大丈夫だな、」

なぜか歯切れの悪い二人のせいでリムルは不安になった。

そうこうしていると紫苑がきた。

何か見てはいけないような名状し難きものを持つて、

リムルが他のメンバーに目線を向けるとリグルドは目を逸らし紅丸は必死に目を瞑

りこちらを向こうとしたない、白老に閃しちや気配を断ち空気と化している。

リムルが人間の姿をとつてることの後悔していると

ムツキ『おい出されているんだからさっさと飲めよ』

リムル『おま、バカか、あんな劇物飲めるか!』

ムツキ『あつそうじやあ代われ俺が代わりに飲んでやる』

そう言つて強制的に肉体の主導権が変わると紫苑からお茶?を受け取りいつきのみした。

紅丸&白老「!?!リムル様!」

ムツキ「まあ、飲めないことはないな」

平然としているムツキ

リムル『あれ?まさかの見た目はアレだけどあんがい飲めるものだったの?』

リムルはとんでもない勘違いをしてしまった。

樹8把

リムルがとんでもない勘違いをしてから1時間後、リザードマンの使者達は地響きを絶たせながらやって来た。

ちなみにリムルは、スライム状態に戻って紫苑に抱きかかえられている。そしてリーダーらしきリザードマンが来ると

リーダー? 「出迎えご苦労! お前たちにも、吾輩の配下に加わるチャンスをやろう光栄に思うがいい!!」

ムツキ『こいつやっていいか?』

リムル『ダメに決まってんだろ!』

この後のシーンは見えていて私がイラついたので没にしました
作者^{シキ}「こら、人が書いたもの勝手に没にするな!」

仕方ないですね、大雑把にまとめると

1あのトカゲ調子に乗る

2リムルを馬鹿にする。絶対に許さない

3ゴブタが回し蹴りを入れる。グツジヨブ

4 ムツキにゴブタが完全にロックオンされる
以上ですね。

次に進めます

トカゲ馬鹿が帰った後、今後について話し合うために全員に集合をかけた。

全員集まり会議が始まった。

リムル「集まったみたいだし会議を始める。まず報告を聞く」

そういうと蒼影が話した。内容は

1 ゴ布林たちの各村の様子

ゴ布林たちは大半があ馬鹿のトカゲについていき残りは恐怖状態になり各地に逃げ

回っているようです

2 湿地帯の様子

リザードマンの首領が戦死を纏め1万近くの軍を編成しているようだ。

3 オークの進行状況

オークの軍勢の数およそ20万

リムル「はあ! 20万だと!？」

紅丸「俺たちの集落を、襲ったのはほんの一部だったてことか?」

蒼影「そういうことだ、調べてみて判明した。奴らの総数は20万入ると考えられる。

南からアメルド大河に沿って、比較的広い進行ルートを通り本隊が移動中だ。道幅と部隊の長さから推測しただけだが、最低でも15万を下回ることはない。森の各地へ侵攻している部隊しているし、敵の数を最小に評価するのは危険だと進言する」

蒼影は迷いなくそう断言する

ムツキ『確実にロードがいるな』

リムル『豚頭帝は^{オフロド}どう動くと思うか?』

ムツキ『あいつらは基本目の前の生き物を喰らうことしか考えていないからな。リザードマンの後は人間の国を襲うだろうな』

リムル『やばいな、もしもの保険にエレン達のほうにも話しとくべきか?』

ムツキ『お前が倒せば問題ない、と言いたいとこだがもしもを警戒するのはいいことだ。誰か使いの者を送れ』

リムル『わかった』

ムツキ『今から地図を出すオークの軍勢がどう動いてるか確認しろ』

そう言い机の上に魔法で作られた立体的な地図を出し

リムル「今からこれを使ってオークの動きを確認する。意見があつたらどんどん行つてくれ」

ルシア『ねえ、普通にそれ出してるけど地図って軍事機密の物よ』

ムツキ&リムル『なん…だと…』

蒼影「あのリムル様これはいったい」

リムル「これはだな」

少女？説明中

リムルが説明し終わりオークや自分たちリザードマンの駒を用意した。

リムル「この盤面どう思う？」

紅丸「どうとは？」

リムル「いや、なんで別動隊を分けたんだ？森をそのまま突き進むのに、何か不都合でもあったのか？」

白老「大軍勢が移動するには、大森林の木々が邪魔になりますからな」

紅丸「じゃあなぜやつらは、俺たちの里を滅ぼしたんだ？本隊の移動と関係ないなら放置しておけばよかったのではないのか？」

白老「ふむ、言われてみれば変ですな」

リムル『ムツキはどう思う？』

ムツキ『ふむ、紅丸たちに聞いてくれ、名前を授けるって言ってた魔人はいなかつたか？て』

リムル「おい紅丸、お前たちに名前を授けるって言って近づいてきたやつは、いなかった

たか？」

紅丸「いきましたよ、怪しかったので里の全員が突っぱねましたけど、確かゲリユなんだったか？」

蒼影「ゲリユミュットだ」

紅丸「そうそれだ！」

リムル（ゲリユミュットって確か）

ムツキ『初代リグルに名づけをしたやつだ。俺の予想通り（呂久和）各種族に名づけをして蟲毒の呪法をした。オークどもは、飢餓者の影響で癒えることのない飢餓がある。そしてバックにいるゲルミュットとやらはオーガに自分の提案を蹴られたことを逆恨みしていてオークに襲わせた』

リムル『いや待てよ、まだ豚頭帝がゲリユミュットの仲間って決ったわけなんじゃ？』
ムツキ『いや、今までロードの影もなかったのにいきなり現れるのは不自然だ、それにロードが突然力を付けると力と飢餓に飲み込まれて正常な判断ができなくなる可能性がある。誰かが指示を出してははずだそれに上位のオークは黒い鎧をまとってると言っていたはずだ。バックに誰かがいるのは確定だそして豚頭帝オークロードという一番魔王種に近い存在に食いつくのは』

リムル『確定してるわけじゃないが名前をばらまいてるゲリユミュットだな』

ムツキ『そういうことだ、全員にそのことを共有しとけ』
リムル『わかった』

渋窮輪

リムル達が話し合いを続けていると、蒼影の表情が鋭くして硬直した。
リムル「どうしたソウエイ？何かあったか？」

蒼影「実は。「分身体」の一体に接触して来た者がいまして、リムル様に取り次いでも
らえないとの事、いかがでしょうか？」

リムル（俺を名指ししたい誰だ？）

ムツキ『おい、リムル多分そいつらは、ドライアド樹妖精だ。あいつらなら植物を通して大抵の
ことは見通せるはず』

リムル『なるほど、あつてみるべきだな』

「わかった、会おうここに呼んできてくれ」

リムルがそういうと同時に緑色の髪の女性が現れた。

紅丸「まさか。ドライアド樹妖精だと！」

の 樹妖精「初めまして、ドライアド魔物を統べるもの“およびその従者の皆様、わたくしはドライアド樹妖精

トレイニーと申します。どうぞお見知りおき下さい」

リムル『「魔物を統べるもの」ってなんだよ』

ムツキ『ただの称号だろ、いちいち気にするな』

リムル「初めまして、俺はリムル。魔物を統べるもの」とかそんなたいそうな者じゃないから普通に接してくれ。で俺に何の用だ？」

トレイニー「はい、本日参りましたのは、今起きている森の異変についてでございませぬ。私も森の管理者として今回の件見過ごすわけにはいきませぬ、ですので私もこの会議に参加させて頂きたく存じます」

紅丸「なぜこの街に来た？ほかにも有力種族はいたはずだ」

トレイニー「今やこの周辺における最大勢力はこの町です。他はガビルと名乗るリザードマンについていきこら一帯にはいません」

リムル『ムツキ、森の管理者がここに来たと思う？』

ムツキ『ふむ、多分豚頭帝オイクロードの存在を確認したと同時にそのバックにも何かいることにきずきそちらを警戒したいんじゃないか？』

リムル『なるほど』

「トレイニーさんは俺たちに豚頭帝オイクロードを倒してほしいにかな？自分たちはそのバックを警戒するために」

トレイニー「さすがですね。すでに豚頭帝オイクロイドの存在にきずいていたとはそして後ろに別の何かがあることも、おっしゃる通りです。私たちは豚頭帝オイクロイドの後ろにいるものを警戒しています。ですので豚頭帝オイクロイドの討伐を依頼したいのです」

リムルがその答えを言う前に

紫苑「当然です！ われらが主リムル様なら豚頭帝オイクロイドごとき敵ではありません！」

！
トレイニー「まあ！ やはり、そうですねそれでは豚頭帝オイクロイドの件よろしく願います」

リムルオイクロイドが豚頭帝と戦うことに決まった。あとはリザードマンの首領のところ蒼影を向かわせ同盟を結べるか尋ねに行ったり、背後に気を付けるように警告したりしたのだった。

虹泡

リムル達がトレイニーに依頼を受けてしばらくが経った。

その間に朱菜やカイジン、黒兵衛がそれぞれ防具や武器、衣服を作ってくれた。

そしてリムル達はリザードマン達と同盟を結ぶために湿地帯へと向かった。

ランガに乗りながら進んで行くとあらかじめ偵察をさせていた蒼影から連絡が届く

蒼影『リムル様。少し宜しいですか？』

リムル『どうした？』

蒼影『交戦中の一団を発見しました。片方はリザードマンの首領の側近です。相手は豚頭族の上位個体のようですが如何致しましょう？』

リムル（後ろに気をつけろって言ったけど警戒してなかったのか？少し酷いが様子見させてもらおうか）

『その子には悪いがすこしよすみしてくれ本気でヤバそうなら助けに入ってくれそれまで豚頭族の観察を頼む』

蒼影『御意』

リムルが蒼影にそう命令する？

ムツキ『へえいい判断だな』

ルシア『酷い判断でしょ！今すぐにも助けに行かないと！』

ムツキ『こっちはわざわざ忠告してやったのに勝手に始めてるんだ。理由がどうあれこちらにとつてはデメリットしかない、この場で反転して一度戻ってもいいぐらいだぞ』

ルシア『むぐ、確かにそうでしょうけど』

リムル『俺的にはもうこのまま豚頭帝オウシロトを倒しておきたいからなその為にもな』

ムツキ『そうだ、相手を殺す為に相手を知る必要がある、これはチャンスだ』

リムル『わかってる』

リムル達はそのまま突き進み蒼影が居るところまで行くと既に蒼影がリザードマンを助けていた。

リムル「もう片付いていたか」

蒼影「はい、本来なら一部を生かして情報を吐かせる予定でしたが呪法が何かで視界を盗み見してるものがいたので先に始末させてもらいました」

リムル「そう言うことなら仕方ないとりあえず回復薬を飲ませてくれ」

蒼影「御意」

そう言いリザードマンに回復薬を飲ませて傷を再生させる

リザードマン「うっ嘘！致命傷だと思ったのに」

リムル「少しいいか？俺はリムルⅡテンペストだ、君はなぜこんなところで豚頭族に追われていたんだ？」

リザードマン「それは…」

リザードマンは話し始めた。要約するとあのトカゲが我慢できずに謀反を起こして首領を牢屋に閉じ込めたらしい

リムル（さてどうしたものか）

ムツキ『さっさと反転するのがいいだろうなこつちまで道連れになる必要はない』

ルシア『何言ってるの！この子助けたんだし他の子達も助けましょうよ！』

リムル『さっきも言ったこのまま勢い任せに豚頭帝を倒しておきたい』

ムツキ『お前がそう言うならそうすればいい』（まあ戦場に豚頭帝がいるのは確かだろうどこかで干渉しないと）

ルシア（また碌でもないこと考えてるわね。私がしつかりしないと）

リムル「蒼影その子連れて首領を助けに行つてやつてくれ」

蒼影「いいのですか？」

リムル「いいよ共通の敵なのは変わらないんだしな」

ムツキ『甘いな』

リムル『いいだろ』
リムル達はそのまま戦場へと向かった。